

日本人の名字の難易度と指導上の留意点

半田 淳子

[要 旨]

本研究は、上級の日本語学習者を対象に、日本人の名字ベスト 200 に関して、難易度と正答率を調査したものである。具体的には、中国・台湾・韓国からの留学生 16 名に、ベスト 200 の名字の読み方を記述してもらった。その結果、1) ベスト 50 の名字の正答率が高いが、下位になるほど正答率が下がるわけではない、2) 正答率が低い名字に使用されている漢字は、上級レベル以上の漢字とは限らない、3) 名字に関する知識と滞在月数には、相関関係が認められない、以上のことが明らかになった。日本語学習者にとって日本人の名字が難しいのは、漢字の難易度に原因があるのではなく、音読みと訓読みの使い分けや濁点の有無の判断に加え、名字に特有の読み方や例外の多さが関係している。名字を正しく読めることは、日本での就職を希望する留学生にとって重要なことであり、今後は漢字の指導にも積極的に取り入れていくべきである。

[キーワード]

日本人、名字、正答率、難易度、滞在月数

1. 研究の背景と目的

上級日本語の読解のクラスで新聞教材を扱った折、難しい漢語は読めるのに、日本人の名前を読み間違ってしまう、或いは読めない学生が多いことに気づき、日本人の名前の何が難しいのかを調査する必要があると感じた。実は、以前から、日本人の名前（名字）の読み方が難しいという指摘はあり、座談会「日本語教育の現状と展望」（2006 年）にも、次のように記されている。

私たちは子どものときから慣れてますので、「小林君」を「コバヤシクン」と呼べるし、「斎藤」と書いてあっても、サイトウと読めるし、藤井（フジイ）も読めるし、何でも友達の名前から覚えてるようなことがございます。（中略）東南アジアからきた漢字のわからない国、そういう方ですととてもたいへん。台湾へまいりましたが、台湾の方でもそれで苦労している、日本人の名前というのは本当に読み辛い、何とかしろというのですけど何ともならないのです。

一方、2010 年 11 月 30 日に「改定常用漢字表」が内閣告示され、これまでは 1,945 字であった「常用漢字」に 196 字が追加され、5 字が削減されて 2,136 字となった。これに、法務省が定める「人名用漢字」（戸籍に記載できる漢字）861 字を加えると、日本人が日常生活で使用する漢字は凡そ 3,000 字となる。当然のことながら、日本語学習者の負担も増えることになるわけだが、「常用漢字表」の改定に伴い、漢字学習の負担を軽減するためにも、漢字の何が必要なかを明確にし、また、どのように指導すれば効率的なの

かについても再考が必要となってくる。

本稿では、日本語学習者にとって、どのような日本人の名字が難しいのか、名字の漢字にはどのような特徴があるのか、どのように日本語の指導に活かしていけば良いのかの3点に関して考察する。

2. 調査対象・方法

日本の私立大学に在籍する16名（1年生9名と2年生7名）に協力してもらい、「日本人の名字ベスト200」（森岡2010）の読み方について記述式で回答してもらった。被験者の出身は、中国が8名、韓国が6名、台湾が2名である。調査時点の日本語のレベルだが、全員が在籍する大学の基準では、上級レベル（日本語で行われる大学の授業に参加することが可能であると判断されるレベル）に位置づけられている。被験者の日本語能力試験の合否だが、1級の合格者が8名、2級が3名、未受験が5名で、いずれも旧試験である。また、調査時点の滞在月数は、平均で26ヶ月であり、最長は48ヶ月、最短は1ヶ月であった。調査日は、2012年4月13日であり、実施に要した時間は15分から20分程度である。

調査に先立ち、以下の三つの仮説を立てた。

仮説①：正答率は、ベスト200の日本人の名字のうち、上位ほど高く、下位になるほど低くなる。

仮説②：正答率が低かった名字に使用されている漢字は、難易度が高い漢字である。

仮説③：被験者の滞在月数が長くなるほど、名字に関する知識が増え、正答数が多くなる。

まず、仮説①の根拠だが、名字のランキングは電話帳をベースにしており、上位の名字になるほどその名字を名乗る日本人の世帯数は多いわけで、被験者との接触の機会も増え、記憶に残りやすく、また周囲の日本人にも該当者がいると考えられる。また、仮説②についてだが、ここでいう「難易度」とは、旧日本語能力試験の区分による漢字の難易度⁽¹⁾のことである。正答率が低いということは、当然ながら、漢字の難易度も高いと推測される。最後に、仮説③だが、日本での生活を通して、日本人と接触する機会が増えれば、より多くの名字を見聞きする機会も増えるため、上記のような仮説を立てた。

3. 調査結果

3.1 正答率

名字の「正答率」だが、被験者の数が16と少ないので、百分率ではなく、正解者数／被験者数で示すことにした。また、漢字の読み間違いだけでなく、空欄も誤答に含めた。「全国の苗字（名字）」（須崎2012）によると、日本人の名字は漢字で11万種類あり、それに対して、読み方は17万種類存在している。そのため、1種類の名字に2種類以上の読み方が正答になる場合も少なくない。今回の調査に使用した「日本人の名字ベスト200」（森岡2010）は、名字に使われる漢字の違いだけでなく、同じ漢字の読み方も考慮した

ランキングであり、「河野」に関して言えば、「この」と「かわの」を別々の名字としてランキングしている。しかしながら、本研究は、漢字の読み方を調査したものであり、読み方が間違っていなければ正答として認めることにした。従って、「河野」という名字は、「この」でも「かわの」でも正解である。ただし、一般的な読み方のみを正答とし、「佐藤」を「さいとう」、「森」を「はやし」と読んでいる場合⁽²⁾は、正答とは認めなかった。

表1は、「日本人の名字ベスト200」(森岡 2010) に関して、正答率別の名字の種類を50位ごとに示したものである。続いて、正答率別の名字の数を、表2に示した。いずれも、表中の()内の数字は、「日本人の名字ベスト200」(森岡 2010)の順位を示している。

表1 正答率別の名字の種類

正答率	1～50位	51～100位	101～150位	151～200位
16 / 16	佐藤 (1) 鈴木 (2) 高橋 (3) 田中 (4) 中村 (8) 加藤 (10) 吉田 (11) 山田 (12) 山口 (14) 木村 (18) 池田 (24) 山下 (26) 石川 (27) 中島 (28) 前田 (29) 坂本 (39) 福田 (44) 松田 (48) 中野 (50)	中山 (58) 石田 (59) 横山 (66) 高木 (70) 高田 (76) 松井 (89) 桜井 (91) 野村 (95)	西田 (110) 西川 (112) 北村 (114) 本田 (122) 福島 (133) 秋山 (144)	川村 (158) 松村 (167) 南 (191) 福井 (196)
15 / 16	渡辺 (5) 山本 (7) 松本 (16) 石井 (37) 青木 (41) 西村 (43) 中川 (49)	田村 (54) 上田 (60) 高田 (76) 上野 (80) 千葉 (87)	島田 (106) 高野 (108) 松下 (146)	野田 (156) 大島 (170) 横田 (175) 高山 (188)
14 / 16	伊藤 (6) 小林 (9) 山崎 (21) 村上 (35)	原田 (51) 大野 (73) 丸山 (74) 村田 (79) 小島 (86) 野口 (93)	水野 (104) 小山 (107) 中田 (116) 吉村 (127) 森本 (139) 石原 (145)	片山 (172) 成田 (180)
13 / 16	井上 (17) 林 (19) 小川 (31)		小松 (105) 安田 (115) 川崎 (119) 中西 (130)	黒田 (161) 西山 (168) 大石 (178) 石橋 (183) 松原 (190) 奥村 (198)
12 / 16	斎藤 (15) 森 (22) 阿部 (23)	宮崎 (67) 宮本 (68) 内田 (69)	古川 (103) 山内 (109) 平田 (118) 飯田 (120) 渡部 (128) 小沢 (143) 大橋 (148) 吉岡 (150)	大久保 (154) 平井 (169) 岩本 (171) 荒井 (177) 大沢 (189) 大森 (197) 内山 (200)
11 / 16	佐々木 (13) 清水 (20) 後藤 (32) 岡田 (33) 斉藤 (38) 岡本 (47)	小野 (53) 金子 (56) 酒井 (64) 今井 (75) 平野 (84) 佐野 (97)	浜田 (101) 川口 (117) 久保田 (123) 川上 (134) 田口 (137) 山中 (138)	星野 (159) 岡崎 (176) 宮田 (181)
10 / 16		和田 (57) 原 (62) 久保 (88)	松岡 (136) 馬場 (147)	小池 (151) 田辺 (157)
9 / 16	藤井 (42)	竹内 (55) 藤本 (77) 大塚 (85) 岩崎 (90) 松尾 (94)	吉川 (121) 岩田 (129) 永井 (135)	浅野 (152) 小田 (182) 伊東 (193) 岡 (199)

8 / 16	藤田 (30) 藤原 (47)	谷口 (72) 杉山 (81) 木下 (92) 大西 (98) 杉本 (99) 新井 (100)	沢田 (124)	荒木 (153) 熊谷 (155) 内藤 (166) 小西 (190)
7 / 16			関 (126)	尾崎 (163) 本間 (173) 河野 (184) 三宅 (195)
6 / 16	長谷川 (34) 三浦 (46)	森田 (61) 柴田 (63) 武田 (78) 菊地 (96)	市川 (102) 矢野 (141) 松浦 (149)	
5 / 16	近藤 (36) 遠藤 (40)	工藤 (65)	辻 (125) 服部 (131)	大谷 (160) 鎌田 (179) 栗原 (192)
4 / 16	太田 (45)		菊池 (111) 五十嵐 (113) 土屋 (140) 広瀬 (142)	早川 (174)
3 / 16		安藤 (71) 増田 (82) 菅原 (83)		堀 (162) 永田 (165)
2 / 16				篠原 (185)
1 / 16			樋口 (132)	須藤 (186) 萩原 (187)
0 / 16			望月 (164)	

表2 正答率別の名字の数

正答率	1～50位	51～100位	101～150位	151～200位	合計
16 / 16	19	8	6	4	37
15 / 16	7	5	3	4	19
14 / 16	4	6	6	2	18
13 / 16	3	0	4	6	13
12 / 16	3	3	8	7	21
11 / 16	6	6	6	3	21
10 / 16	0	3	2	2	7
9 / 16	1	5	3	4	13
8 / 16	2	6	1	4	13
7 / 16	0	0	1	4	5
6 / 16	2	4	3	0	9
5 / 16	2	1	2	3	8
4 / 16	1	0	4	1	6
3 / 16	0	3	0	2	5
2 / 16	0	0	0	1	1
1 / 16	0	0	1	2	3
0 / 16	0	0	0	1	1

まず、仮説①「正答率は、ベスト200の日本人の名字のうち、上位ほど高く、下位になるほど低くなる」について検証する。表1と表2が示すように、正答率が12 / 16以上の名字は50位以内が7割を占めており、この中の18種類の名字の正答率が16 / 16である。

逆に、全員が不正解だった「望月」、正解が1名のみの「須藤」「萩原」、2名のみの「篠原」、3名のみの「堀」「永田」、4名のみの「早川」などは、150位以降の名字である。このことから、確かに上位の名字の方が概ね正答率が高いと言えるが、必ずしも下位になるほど正答率が下がっていくとまでは言えず、仮説①を裏付けるまでには至らなかった。

正答率が16/16だった名字の中には、初級の日本語テキストで使用されている名字が多く見受けられる。例えば、ICUの *Japanese for College Students, Basic, Vol.1-3* では、「田中」の出現数が最も多く30課中19課であり、続いて「山田」が9課、「佐藤」が6課、「鈴木」が5課となっている。「山下」「中村」「高橋」「本田」も、ICUの教科書で用いられている名字である。これらは、いずれも正答率が16/16の名字であり、「日本人の名字ベスト200」(森岡2010)の上位30位以内に入っている。その他、「山本」「高山」「村田」「林」「小川」も、ICUの教科書に登場してくる名字であり、いずれも正答率が13/16以上である。つまり、日本語のテキストに使用されている名字の正答率が高いということである。逆に言えば、日本語のテキストに登場してくる日本人の名字は、現実の日本社会を反映しているということになる。

また、「山口」「石川」「中野」「福島」「福井」「上野」「千葉」「成田」「川崎」「宮崎」「大久保」などの地名、「松田」「松井」「本田」「野田」「中田」「石原」などの著名人の名字も、正答率が高い。特に、「福島」「福井」などは、調査当時、原発関連の新聞記事で見ることが多く、「中野」「大久保」などは駅名として、「成田」は空港名として記憶されていたようである。一方の著名人は、「松井」(野球)「本田」「中田」(サッカー)などのスポーツ選手と、「石原」(前東京都知事)「野田」(前内閣総理大臣)などの政治家の名字が中心である。

3.2 難易度

「日本人の名字ベスト200」(森岡2010)に用いられている漢字は、異なり字数で136字であり、リーディング・チュウ太 (<http://language.tiu.ac.jp/>) を用いて日本語能力試験に出題される漢字との関連性を調べてみると、表3のようになる。なお、網掛をした漢字は、正答率が8/16未満の名字に使われていた漢字である。

表3 日本語能力試験(旧)と名字

	級外	1級	2級	3級	4級
漢字の数	23	22	45	18	28
種類	藤、伊、柴、阿、岡、菅、熊、辻、鎌、樋、篠、須、邊、齋、栗、邊、齋、齊、櫻、濱、浅、澤、關、廣 ⁽³⁾	佐、鈴、紺、吉、松、井、崎、宮、杉、塚、保、浦、尾、菊、堀、嵐、瀬、齋、齊、桜、浜、沢	橋、渡、緑、村、林、加、和、石、森、原、酒、清、横、鄙、池、内、橋、谷、島、丸、武、増、坂、平、遠、竹、重、荒、星、望、永、片、成、河、宅、馬、奥、辺、浅、園	田、口、野、野、屋、場、服、飯、地、秋、安、近、新、古、早、広、青、黒	山、川、水、土、木、本、金、月、子、今、大、中、小、上、下、前、後、間、長、高、三、五、土、千、東、西、南、北

ここでは、仮説②「正答率が低かった名字に使用されている漢字は、難易度が高い漢字である」を検証する。「日本人の名字ベスト200」(森岡2010)で使用されている136

種類の漢字を、旧日本語能力試験のレベル別に分類し百分率で表すと、初級（4級と3級）が約33.8%、中級（2級）が同じく約33.8%、上級以上（1級と級外）が約32.4%となり、ほぼ均等に分布していることが分かる。その一方で、正答率が8/16に満たなかった名字に使用されている漢字は、上級レベル以上の漢字が15字、中級レベルが10字、初級レベルが9字となっている。ただし、これだけでは、仮説②を裏付けることはできず、部分的に修正が必要である。

確かに、「篠原」「樋口」「須藤」「萩原」など、正答率が2/16以下だった名字には級外の漢字が用いられているが、一人も正解者がいなかった「望月」は2級の漢字である。また、「五」「十」は4級の漢字であるが、「五十嵐」という名字になると正答率は4/16で、12名の誤答のうち10名が空欄であった。「土屋」の「土」も4級の漢字であるが、空欄が8名おり、誤答の2名は「つち」ではなく「ど」と読んでいる。「土曜日」の「土」である。同様に、「近藤」の「近」や「工藤」の「工」も3級の漢字であるが、6人が「近」を「きん」と読んでおり、「工藤」の「工」も5名が「こう」と読んでいる。こちらも、「近所」や「工場」といった既習の熟語からの推測である。「服」も3級の漢字であるが、「服部」は読めず、「ふくべ（或いは、ふくぶ）」と回答している被験者が7名いた。

2級の「太」「市」「永」も、「太田」を「おおた」と呼んだのは2名のみで、「ふとだ（或いは、ふとた）」「たいだ」が3名、「永田」も「えいた（或いは、えいだ）」が5名、「市川」も「しかわ（或いは、しがわ）」が4名いた。いずれも、「太い」「太陽」「永久」「～市」など既習の漢字からの連想である。つまり、名字の漢字が難しいのは、既習であるかどうかや漢字そのものの難易度よりも、漢字の音読み・訓読みの使い分けと「望月」のような特殊な読み方の存在が大きく関係しているのである。名字の場合は、初中級レベルの漢字でも、教室では習わない読み方をする場合（例：酒井/さかい）が少なくないので、漢字の指導に当たっては注意が必要である。

3.3 滞在月数

次に、被験者の滞在月数と正答数の相関関係から、仮説③「被験者の滞在月数が長くなるほど、名字に関する知識が増え、正答数が多くなる」の妥当性を検証する。表4は、被験者の国と地域、性別、滞在月数（単位は月）、200名字中の正答数を示したものである。なお、ここでは正答率ではなく、「正答数」として正解した名字の数を示してある。「国・地域」の欄の「韓」は「韓国」、「中」は「中国」、「台」は「台湾」のことである。「滞在月数」は、短い順に並べてある。

表4 正答数と滞在月数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
国・地域	韓	韓	韓	中	中	韓	中	台	中	中	韓	中	台	中	中	韓
性別	女	男	男	男	男	女	女	女	女	女	女	男	女	女	女	男
滞在月数	1	9	12	18	24	24	24	30	31	32	32	33	33	36	36	48
正答数	124	182	133	135	110	125	143	150	151	129	161	179	114	118	123	185

被験者の正答数であるが、平均は 141 名字（小数点以下、切り捨て）であった。表 4 が示すように、正答数が最も多かった P は、滞在月数が 48 ヶ月で、185 であった。一方、正答数が最も少なかった E は、滞在月数が半分の 24 ヶ月で、110 であった。しかしながら、滞在月数が最も短かった A の正答数は 124 で、E だけでなく、M、N、O を上回っている。また、12 ヶ月ごとの正答数の平均を出してみると、12 ヶ月以下が 3 名で 146、13 ヶ月以上 24 ヶ月以下が 4 名で 128、25 ヶ月以上 36 ヶ月以下が 8 名で 140、37 ヶ月以上 48 ヶ月以下は P の 1 名のみで 185 であった。

以上のことから、調査前は仮説③が証明されるものと予想していたが、日本滞在が長くなれば正答数が増えるわけでは必ずしもないようである。確かに最長 48 ヶ月の P の正答数が最も多くなっているが、その他のデータからは正答数と滞在月数には相関関係が認められなかった。恐らく、日本人の名字が正確に読めるかどうかは、滞在月数だけでなく、日本人の友人の有無やアルバイトに従事しているかどうかといった生活環境と大きく関係があると考えられ、この点は別な調査が必要である。

4. 考察

日本人の名字には、好んで使われる漢字があり、「日本人の名字ベスト 200」（森岡 2010）の中で、使用頻度の高い漢字（括弧内は使用回数）には、田（43）山（17）藤（16）野（15）川（13）村（12）本（12）井（12）大（10）小（10）松（10）がある。その他の漢字は、使用回数が 10 回未満の漢字である。「藤」は、以前は常用漢字ではなかったが、2010 年の「改定常用漢字表」から新たに加わった漢字である。「藤」はもともと人名に使われることの多い漢字で、河内（2012）によると、「教科書コーパス」の検索結果では、日本の小・中学校教科書の中の「藤」はすべて人名を表すためのもので、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」による調査でも、「藤」は人名での使用頻度が極めて高いという結果が出ている。つまり、「藤」という漢字は、日本の文学や歴史を学ぶ上で頻繁に登場してくる漢字であり、日本の社会や文化を理解する上で、学習が必須の漢字であると言える。

「藤」だけでなく、名字の場合は、漢字は習っても、読み方を習っていないことが多い。そのため、日本語学習者は、音読みか訓読みか、濁点が必要か不要かを適切に判断できないようである。加えて、「五十嵐」のような特殊な読み方の名字も少なくない。「小川」「小池」などの「小」の読み方も、「お」か「こ」で迷う学生が多い。しかも、名字の読み方にはバリエーションが多く、更には例外的な読み方もあり、規則性を見つけるのが難しいのが実情である。例えば、「村上」は「むらかみ」「むらうえ」のどちらの読み方も正しいが、「井上」は「いのうえ」は良いが、「いうえ」とは読まない。同様に、「小川」は「おがわ」でも「こがわ」でも良いが、「小松」は「おまつ」とは読まず、「こまつ」のみが正解である。「川口」「山口」「野口」「田口」も、「山口」と「野口」の「くち」は清音でも良いが、「川口」と「田口」は濁音でしか読まないといった具合に、なかなか規則性が見つからず、日本人でも読み方のルールを明確に説明できない名字が多い。

漢字 2 字の名字の場合、「山」「森」「松」「石」のように、上下で読み方が変わらないものもあれば、「田」「木」「川」のように、下に付いた場合は濁音になる漢字もある。ま

た、「藤」のように、上の場合は訓読み（例：藤井）、下の場合は音読み（例：加藤）になるものや、「本」のように、その逆（例：本田／杉本）になるものもある。教室では、こうした規則性を学習することも大切であるが、規則に当てはまらない名字も少なくない。「藤」の場合は、音読みでも「遠藤」「安藤」「近藤」「工藤」など「どう」と読むのが一般的だが、「後藤」のように「とう」と清音で読む名字もある。「田」にしても、「八田」の場合は清音になる。このように、読み方には例外が多いことが、日本人の名字をより一層難しいものになっているのである。

5. まとめと課題

本稿は、日本人の名字ベスト 200 に関して、三つの仮説を立て、検証を行なった。その結果、仮説①「正答率は、ベスト 200 の日本人の名字のうち、上位ほど高く、下位になるほど低くなる」に関しては、上位の名字の方が概ね正答率が高いと言えるが、必ずしも下位になるほど正答率が下がっていくとまでは断定できなかった。仮説②「正答率が低かった名字に使用されている漢字は、難易度が高い漢字である」に関しては、漢字そのものの難易度よりも、音読み・訓読みの使い分けや、熟字訓のような特殊な読み方の存在が大きく関係していることが明らかになった。最後に、仮説③「被験者の滞在月数が長くなるほど、名字に関する知識が増え、正答数が多くなる」だが、滞在期間が最長の被験者の正答数は最も多かったが、その他のデータからは、正答数と滞在月数には明らかな相関関係は認められなかったことを繰り返しておく。

名前を正しく読めることは、より良いコミュニケーションを構築する上で重要である。特に、卒業後、日本での就職を希望する学生にとっては日本人の名字を学ぶことのメリットは大きい。従って、名字をどのように日本語の授業に取り入れていくかは今後の課題である。須崎（2012）の調査では、上位 200 までの名字を名乗っている日本人の数は約 5,400 万人で、人口の約 45% を占めているとのことである⁽⁴⁾。つまり、日本人の名字のうち、ベスト 200 を学習すれば、日常生活やビジネスを通じて接触する可能性の高い日本人の名字をかなり網羅できるということになる。

日本語の教科書を編集する場合は、日本社会の現状にあった名前を使用する方が良い。今回の調査でも、教科書に登場する名字の正答率が高いことが明らかになったので、初級レベルでは未習の漢字でも、上位の名字を積極的に登場させるべきである。また、画数が少なく、一見簡単そうに見える漢字でも、名字に特有な読み方を授業で習っていない場合が多くあることも明らかになった。まずは、最も一般的な読み方を指導し、読み方にはバリエーションが多数あることを教え、初対面の折には、名前の読み方を確認するように指導することも大切である。

* 本稿は、2012 年日本語教育国際研究大会で発表した「日本人の名前の特徴と指導上の留意点」（2012 年 8 月 19 日、名古屋大学）に基づくものである。

注

- (1) 『日本語能力試験出題基準』(1997) では、1 級の漢字は、「第 1 水準漢字」と「第 2 水準漢字」に分かれており、「第 1 水準漢字」とは「常用漢字表 (旧)」から使用頻度の低い 19 字を除いた 1926 字のことである。また、「第 2 水準漢字」は、『現代新聞の漢字』及び『現代雑誌九十種の用語用字・漢字表』に挙げられている「常用漢字表 (旧)」表外字のうちから、1 級の語彙を表記する漢字の範囲内で選定されている。「第 2 水準の漢字」としては、114 字が選ばれ、読みができれば良いとされている。
- (2) 「全国の苗字 (名字)」(須崎 2012) によれば、このような特殊な読み方をする名字が存在しているとのことである。
- (3) 「邊、齊、櫻、濱、淺、澤、關、廣」の旧漢字は、「日本人の名字ベスト 200」(森岡 2010) では、「辺、斉、桜、浜、浅、沢、関、広」の新漢字と併記されていたため、受験者は新漢字を読んで回答した可能性がある。15 位の「斎藤／齋藤」のみ、両方とも旧漢字であった。
- (4) この数値に関しては、筆者が直接、須崎春夫氏にメールで連絡し、教えてもらったものである。須崎 (2012) の「全国の苗字 (名字)」ベスト 200 と森岡 (2010) の「日本人の名字ベスト 200」は、後者が読み方も考慮しているため、順位が異なる名字も若干あるが、この数値は参考になるものである。ちなみに、須崎氏は複数の電子電話帳を、森岡氏は紙媒体の電話帳をベースに調査を行っている。

参考文献

- 河内昭浩 (2012) 「改訂常用漢字表における追加字種の小・中学校教科書出現状況」『国語科教育』71、51-58
- 国際交流基金 (1997) 『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 須崎春夫 (2012) 「全国の苗字 (名字)」
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~suzakihp/index40.html> (2012 年 6 月 25 日検索)
- 座談会「日本語教育の現状と展望」(2006) 『國學院雑誌』107-1、32-70
- 半田淳子 (2012) 「日本人の名前の特徴と指導上の留意点」2012 年日本語教育国際研究大会、2012 年 8 月 19 日、名古屋大学
- 森岡浩 (2010) 「日本人の名字ベスト 200」
<http://home.r01.itscom.net/morioka/myoji/best200.html> (2012 年 5 月 16 日検索)
- Japanese for College Students, Basic*, Vol.1-3, Kodansha International, 1996

The Difficulty of a Japanese Family Name and the Important Matter on Instruction

Atsuko HANDA

This research investigates difficulty and a percentage of correct answers about the top 200 of Japanese family names for 16 foreign students from China, Taiwan and South Korea in the upper Japanese language class. As a result, although the percentage of correct answers of the top 50's family names is high, a percentage of correct answers does not necessarily fall in the lower rank. In addition, the Chinese character of a family name with a low percentage of correct answers does not necessarily have high difficulty, and correlation is not observed in the knowledge about a family name and the length of stay in Japan. The reason is not because of the difficulty of Chinese characters used in the family names but because of proper use of phonetic reading and native Japanese reading, and the existence of a voiced consonant mark. Furthermore, the numerousness of reading peculiar to a family name and exceptions is also related. It is important for foreign students who wish employment in Japan that a family name can be read correctly, and the reading of Japanese family name should be positively taught in the Japanese language course.

Keywords:

Japanese, family name, percentage of correct answers, difficulty, length of stay